

---

# 完璧

栗山 蟹

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

完璧

### 【Nコード】

N0881T

### 【作者名】

栗山 蟹

### 【あらすじ】

なにもできない少年ハイリは、あるとき自分にできる善行を見つける。それは自殺だった。実行して成功したはずのハイリになぞの声が話しかける。なぞの声にそそのかされすばらしい生き（死に）方をするにはなにが必要か探す旅にでることになってしまった。そして、第一に検証することにしたのは「努力」であった

## 飛び立ち（前書き）

一部言葉の使い方が一般的ではないところがあります。  
よみにくいかもしれません。

## 飛び立ち

春。鳥は巣立ち羽ばたき、花は咲き誇る。そんな季節。

この少年もまた巣の頂上から飛び立ち、地面に赤い花を咲かすのだった。

彼の名はハイリ。彼は気がつけばクズあつかいされていた。

彼のスペックは決して低くはない。いたって普通、もしくはそれ以上であった。

足は人よりは速い、腕力は一般的数値であり、頭もそこそ良い。なのになぜかうまくいかない。あれもできない、これもやれない。なにをやらしても失敗つづき。

だが、努力を欠かすことはなかった。常に向上心の塊だった。

しかしある時彼は気がついた。やれないことはやらなければ良い。あれもやらない。これもやらない。なにもやりたくない。そんなめんどくさがり。

そうなれば、傷は浅くなる。そして常にけだるさをまとった。努力嫌いな人間になった。

一見ひねくれ者に見えるが、彼の芯は素直であり、まじめである。成功しない結果は変わらないが、「大事なのは結果ではない」といった綺麗ごとを真に受けるあたりにも彼のまじめさが垣間見れる。そして、全てに崇られたくない彼は何事にもふれることをやめた。なんとも素直な行動原理である。

できる善行はできる限りこなしたい、それが本心である。がそれが見あたらない。

それでも、ある時一つだけできることをみつけることができた。それが自殺である。

クズが消えれば親の負担も減る上、舌打ちをする人間も減らせる。願わくば今より良い生き物になり、良い暮らしができるかもしれない

い。そんな淡い希望をもつて宙を舞った。

そうして、彼は彼の全てをなくした。彼は何事にも触れることができなくなった。

なにもない空間。彼の体もない、真つ暗な空間。そこにいた。

「ねえ、少年くん今どんな気分？」

無居な空間に無表情な声の女の子の高い音が突然に響く。

ハイリは驚いたがすぐに冷静さを取り戻し、さめた言葉を吐く。

「ああ、少年のままなのか。がっかりだ」

かわいい声は同様などせず、かわらない調子で答える

「何様ならよろこぶ？神様さま？」

「そんな職は願い下げだね。めんどい」

間をあげず、即座に空間をうめるハイリの声。

そして、かわらない声が、かわらずかえす。

「願ってたところがあつたんだね。」

ハイリはあたりまえといった口調で言い返す。その声には少しばかりにしたような音もふくれていた。

「子供ならだれでも願う仕事だろ？」

「ころころ夢をかえちゃっていいの？」

「ころころころんで、傷だらけになるのが人生だろ？」

「傷がすきな？」

ほんの一瞬言葉が詰まったハイリだがすぐに声を取り戻せた。落ち着いたいつものけだるい声のようだが、確実に焦りも混じっていた。

「勲章だからなあ」

「んじゃあ　なんで転ぶことをやめちゃったの？」

女の子の鋭い言葉を打ち返す声をハイリは持っていなかった。

そこに、追加する無表情な声。

「転ぶことがほんとに必要か確かめてみない？」

そしてハイリは目を覚ました。

見知らぬ景色が彼の目に飛び込む。

## 飛び立ち（後書き）

お疲れさんですね。

「自分にできることは自殺しかない」という考えはよくあるものらしいのです。この主人公のパターンは知らんがね。気がつかれてる友人がいたらちゃんと話をきいてあげると二重丸です。

あと、「大事なものは結果ではない」を綺麗ごとって言うてるけど、個人的には本当に大事なことだと思ふのですよ。なにことも経験だよね。経験大事。マジで。

つぎがいつできるかわかりませんよ。わりと忙しいをやってるのであとなんか書こうと思ったけど忘れたのでここでさよなら。

ありがとさんです。

## 渡りに船

「んで、体があるんだよお」

ため息まじりのハイリは、けだるさと不満の塊と化していた。

一面砂だらけの空間に一人生きて、とりのこされていたのだから、しかたのないことといえるだろう。

せつかくの自殺という努力をなかったことにされた怒りと絶望感はい言ひ知れないものがある。

「転んで、あがいて、傷だらけな人生のいいところ確かめるのに、は体が要るとおもうんだよね」

あの女の子の声がこんどは頭に響く。

生きているかぎりその声を聞くことはないと勝手な想像をしていたハイリにとって予想外な展開と言えるだろう。

あきれて声しかでないところである。

「ああ、だからこんなとこにいるのか。どつりで立つてるだけで精一杯なわけだ。

実践させてみるとは、なんともまじめな方だなあんたは。でもモルモットの扱いが悪いんじゃないか?。」

ハイリのいる場所は非常に風が強く、ふらつく一方だった。

「それで? 転ばないの? はやく」

「転ぶくらいなら寝転ぶことにする」

と言つて砂の上に倒れこんでしまった。

ふて永眠をこころみようとするハイリに近づく男性の影。

男性がハイリを見下ろしたと同時にハイリが声をかける。

「やあ、助け舟かい? 船賃はおいくらで?」

男性は微笑み優しく受け答える。

「そんなものは要りませんよ。それより、あなたはおいくらですか?」



予想外の返答に想像がふくらみ不安が広がる。

人身売買、奴隷、そんな言葉が頭を駆け巡り恐怖の念でいっぱいなる。

が、すぐにどうでもよくなる。この男性とともに居た方が今よりは良いと判断したのだ。

「あんたとセットでお安くしてあげるよ？」

「セットで安売りだなんてとんでもない。貴方ほどの人間は高値で売買されるべきでしょう」

「あつたま固いな、さぶいば製造機さんよ。とにかく助けておくれよ」

「すみません、今お助けします。」

慌ててハイリのことを両腕で持ち上げる。あまりにも軽々とお姫様抱っこをするので不信に思うハイリ。

人間のそれではないように感じたのだ。力をいれるそぶりさえしなかったのだ

そして確信を持ち上げる言葉。

「それにしてもよく私が機械だとわかりましたね。」

驚きよりも納得のほうが大きかった。が、すぐに驚きのほうが大きくなる。

まるで人間にしか見えない、馬鹿力の持ち主を見つけたのだからあたりまえであろう。

「ありやま あんたロボットなのか。どうりでお堅いわけだ。」

「どこか痛みますか？私の体はあまり硬くないと思いましたが」

確かに彼の体は人間と同じような質感をもっていた。

「内が固い。二つの意味で」

こうして、二人は機械の街プロメテウスへとむかった

## 渡りに船（後書き）

今回あまり動きがありませんでしたね。

でも 冒険ものっぽくなってきたのではと

街の名前は今でも悩んでいます。もしかしたら後で変えるかも

今回かたいの漢字間違ってたらすごい恥ずかしいね。そこ重要なのに。

間違ってたなら教えてください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0881t/>

---

完璧

2011年10月9日00時28分発行